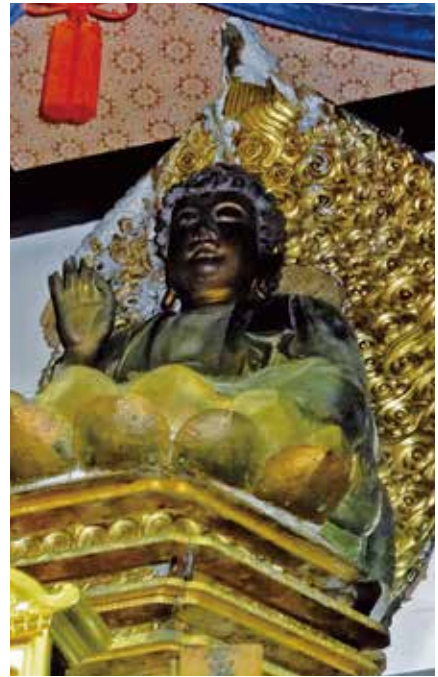




秋田名「佛」 ～1教区 西来院(田中事務局長御自坊)の佛様～



執行部座談会

二年間の任期終了を間近に控え、執行部中心メンバー四人に話をしてもらいました。

(聞き手・菊地大樹)



——二年間を振り返って

中村会長「会長になって初めての行事(弁道会)に多くの会員が参加してくれて、とても嬉しかった。任期中のテーマを決めなかった事も、自分にとっては良かったと思っています。」

菅原副会長「多くの方が参加しやすいような、敷居の低い雰囲気を作れたのではないかな。」

赤石副会長「様々な行事に幅広い年代の方が参加してくれたね。個人的には、チーム卓道に参加出来て良かったし、楽しかった。」

中村「祈りのつどい」に関しては、若手の参加が少なくて残念だったな。」

田中事務局長「秋彼岸中だったということも関係したのではないですか。開催日はもっと慎重に決めるべきだったと反省しています。法要中、数人の檀家さんがおはぎを持って来ていた。」

中村「日」には早めに設定しないとダメだね。」

——最も印象に残った行事は？

中村「やっぱり、第一回目の弁道会。自分がどうしても勉強したいと思っていた事だし、参加人数も多かったし。勝平寺様(秋田市)をお借りしたけど、広くて良かったよね。」

田中「駐車場も広いし、本当に有り難い会場でしたね。」

赤石「昔の活動内容やその時の気持ちを、きちんと若手に伝える必要があると思います。過去の青年会の歩みがあるから今がある。」

田中「昔の歩みを広報に載せるという方法もある。」

赤石「自分達は昔を知っているけど、若い会員にも共通認識として伝わっていったら良いね。」

田中「次期執行部には、様々な情報伝達にも挑戦してもらいたいね。また、曹青のカラーは会長のカラーだとつくづく感じました。中村会長は、明るく楽しく。テーマを決めないで皆に参加してもらおう、楽しい青年会だった。敷居が低く、明るいカラーで色々な事が出来たと思います。」



石焼鍋を食べました。閉校式では各班長より修了証を受け取り、怪我や病気も無く全員元気に帰って行きました。

今回は初めての秋田曹青主催で、会員が中心になって企画・運営が行われました。天候にも恵まれ、子供達が最後に「帰りたくない。」と言っていて嬉しく思いました。全四班の班長を会員が担当しましたが、二泊三日の過密スケジュールの中、常に子供達を注意深く見



守っていた事に感心しました。各教区で行っている「子供坐禅会」での経験が活かされているのではないかと感じました。また、多くの人脈や経験をもっている会員の頼もしさを実感しました。『男鹿なまはげ教室』を通じて、子供達の笑顔と、秋田曹青の更なる可能性を見る事が出来ました。

(菊地大樹 記)



第八回『祈りのつどい』と

『住職学研修』

平成二十八年九月十九日、東泉寺様(秋田市金足)を会場に、第八回『祈りのつどい』と『住職学研修』が開催されました。

午前十一時より、事前研修として涌井真弓氏(秋田グリーンフケア研究会代表)より、支援者の心得や守るべき事などの説明を受けました。昼食を済ませ午後一時より追悼法要を営み、藤里町月宗寺住職・袴田俊英老師による法話がありました。参加者は二名、曹青会員は十名程でしたが、厳粛な法要でした。法話では「自死で亡くなった方達は今、我々が必要な事を教えてくれている。」や「涙を寺に置いて行って下さい。」といった言葉がとても印象的でした。参加者は涙を流しながら聴いていました。その後休憩を挟み、茶話会になりました。音楽が流れていてゆったりとした雰囲気ではあるものの、初めは緊張してなかなか話に入る事



随聞会に参加して

ずいもんえ

に躊躇してしまいました。自己紹介や提供されたお菓子を過ぎて徐々に話が広がり、最後は皆さんにこやかに帰って行かれました。

『祈りのつどい』が終了すると、引き続き『住職学研修』が行われました。袴田老師に「悲しみの先にあるもの」と題して講義していただきました。「自殺」についての歴史、キリスト教との関わり、「自由」とい

う概念などについての講義でした。難しい内容でしたが、僧侶として考え続けていかなければならぬ事だと思いました。

『祈りのつどい』は今回で八回目になります。我々が研鑽を深める為にも、必要な場であると感じました。

(菊地大樹 記)

今回の随聞会は、本山研修等を含めて二泊三日で執り行われました。中村会長をはじめ二十五名の青年会員が参加し、とても有意義な研修旅行となりました。

一日目は永平寺での参籠研修でした。開講式にはじまり、夕方からは講義・坐禅を行いました。翌朝は坐禅↓朝課↓不老閣拝問↓監院寮添茶という流れでした。講義では本山単頭・中西道信老師から『正法眼蔵』第十九「古鏡」についてありがたいお話をいただきました。大衆も講義を聴いていたので、安居していた時の気持ちになって参加させてい

ただきました。また、吉祥閣の禅堂で久々に単に上がってする坐禅や法堂でのお勤めは、とても懐かしく感じました。

二日目は永平寺を出発し、輪島塗の「しおやす工房」を見学して、總持寺祖院を拝登させていただきました。祖院では大祖堂で中村会長を導師として諷経をあげました。また、知客老師から能登地震の復興の現状をお話しいただきました。大祖堂の修復が終わり、次の修復工事に入っているということでした。地域の象徴であるお寺ということとで、地域の方々のためにも一日も早い復興を切に願うばかりでした。

三日目は金沢を出発し、富山県高岡市の瑞龍寺を参拝しました。瑞龍寺の御住職に案内していただき、懇切丁寧に伽藍の説明をいただきました。前田利家公五十年忌法要のために約二十年の歳月をかけて建立された寺院だけあって、総門をはじめ七堂伽藍の一つ一つが細部まで計算されて造りこまれていて、とても感激しました。

今回の随聞会はいつもの研修とは違って、本山をはじめ様々な地域の空気に触れ、見聞を広められたと思います。「百聞は一見にしかず」といいますが、まさにその通り

でした。また、四十二歳から二十六歳まで幅広い年齢層の青年会員が参加しましたが、今まで以上に親睦を深めることにもつながりました。

(戎谷周平 記)



東日本大震災物故者七回忌法要

第二教区 東泉寺副住職 柴田和明



去る三月十一日、あの東日本大震災から六年が経ちました。各地で休廣忌法要が営まれるなか、秋田曹青は岩手曹青様より依頼された三陸の各御寺院様へ随喜することとなりました。

そのなかで秋田県第二教区は、震災以降縁の深い大槌町吉里吉里吉祥寺様の法要に随喜しました。

当日午前十時、法要に先立ち、「抜苦地蔵」の開眼除幕式が営まれ

ました。この地蔵菩薩の造立された経緯を記した碑文が、震災で大切な方を亡くされた、あるいは未だ行方不明の方たちを思う人たちの気持ちを代弁していると感じましたので、吉祥寺様よりご了解をいただき、掲載致します。

「抜苦地蔵」

平成二十三年三月十一日(金)

午後二時四十六分に発生した地震により多くの尊い命が犠牲になり大切な方との突然の別れを経験しました。

未だ行方不明の御霊や、この世で生きていく残された私達の悩みや苦しみを救ってくださる地蔵様がいらつしやいます。

生きたくとも生きることが出来なかつた方々の分まで、私たちが生きてゆく力を授けてくださいます。

碑文 吉祥寺住職 高橋英悟



物理的な復興は、遠く離れていてもニュースなどで知り得ることも知れませんが、こころの問題は現地に起いても伺い知れないことの方が多く感じます。当事者ご自身でさえ、喪失体験や自らの心とどのように向き合い、折り合いをつければよいのか、未だに手探り状態にあるというのが実情かもしれせん。

私たち僧侶は自坊にあつても亡き人と縁の深い方々に接していきませんが、喪失体験との向き合い方はそれぞれであるということを実感されているのではないのでしょうか。それはまた被災された方々と

の接し方にも当てはまり、一人ひとりと向き合うことが大切です。

この六年の出会いの中で、僧侶として震災の復興を支援することのひとつは「祈りを捧げること」と思える出来事が幾度となくありました。

読経の声に「ありがとう」と声をかけられたことがいかに多かったことか。

「祈る」行為の力をみた気がします。

震災後、檀信徒の気持ちにずっと寄り添ってこられた吉祥寺様は、大槌町震災物故者の記録をまとめた「生きた証プロジェクト」を主導されました。休廣忌法要に於いては導師として、刊行されたばかりの『生きた証』を仏前に献じられました。

かつて毎日をともした方が生きた証を確認すること、そして冥福を祈ることは、残された方々が生きていく上での支えに繋がるのではないのでしょうか。抜苦地蔵に託された「生きたくとも生きることが出来なかつた方々の分まで私たちが生きてゆく力」を得ることは、私たち僧侶にもほんの少し、お手伝

いできるかもしれません。おこがましいようですが（重複しますが）、それが僧侶ができる、復興支援のひとつであるようにも思えるのです。



大本山總持寺祖院 震災復興委員会より 感謝状が届きました

平成二十八年七月二十一日、能登半島大震災に起因する祖院震災復興事業の浄財寄進に対する感謝状が、秋田曹青宛に届きました。平成二十六年三月で第一期事業が完了し、二期事業として仏殿等の復旧工事に着手しているそうです。

秋田県食肉流通公社見学

焼き肉・すき焼き・ステーキ・ハンバーグ・チャーシュー麺・カツカレー・もつ鍋・ハム。全て私の大好物だが、牛肉や豚肉がどのようにして我々の口に届くのか、今まで見学する事が無かった。食事を目の前に「命を頂いている」とか「多くの方のお蔭でいただく事が出来る」と言っているが、実際に見ていないのに分かったように振る舞っていたとしたら、檀家さん達への説得力に欠けると思う。そこで、秋田市河辺にある秋田県食肉流通公社を見学させていただいた。

秋田県食肉流通公社は、全県で生産された肉用牛の約六十%、肉豚の約四十%を搬入・解体処理する県内最大の施設。年間に豚は約十六万五千頭、牛は約三千八百頭、馬は約二百五十頭が解体処理される。豚は県内全域、牛は県南（湯沢・雄勝・由利など）からの搬入が多く、馬は県北からの依頼が



主だそうだ。白衣・長靴を借りて施設の中に入る。食肉を扱う施設の為、当然ながら消毒や衛生面には厳しかった。詳しい説明を受けながら様々な作業を見せてもらった。食肉処理を経て解体され、我々が普段スーパーで目にする部位に分けられていく。自分の持ち場で責任感を

持ちながら作業している様子が感じられた。室温は常時十℃に設定されているため、見た目以上に体力の消耗が激しそうだ。破棄する部分はほとんど無く、部位に応じてその都度丁寧に処理していた。七十五名の方が働いているそうだが、ここだけでも多くの方々のお世話になっている事に気付かされた。

「お寺さんで見学に来た方は初めてだと思おうよ」と言われた。もしも無関心でいるとしたら大問題だと思ふ。我々は様々な年齢・職業・立場の方々と話をする機会が多い。社会の事柄について、もつと積極的に関心を持たなければならぬ。人との繋がりが見えにくい現代において、我々僧侶が可視化させる事が重要になってくるだろうと思ふ。

流通公社様には、快く見学を許して頂き、感謝申し上げます。秋田の畜産業の現状や農業と畜産業の関係など、非常に興味深い話も教えて頂いた。非常に有り難い経験が出来たと感謝している。帰り道の途中に食べたチャーシュー麺が今まで以上に美味しく、有難く感じた。

（菊地大樹 記）

書籍紹介③

おかざき真里『阿・吽』

(監修・協力)阿吽社 「月刊スピリッツ」にて連載中)

天台宗の開祖・最澄(七六六?~八二二)と真言宗の開祖・空海(七七四~八三五)―日本佛教史に偉大な足跡を残したのみならず、二人が活躍した平安初期の佛教は現在の主要宗派の基盤であり、文化・思想の中心をなしている。『阿・吽』は、二人の生涯を軸として、この時代を描く巨編である。

生真面目な青年僧であった最澄は、大寺院の僧侶達が酒色に耽るさまに失望し、無力な民衆を目的の当たりにして、全ての人々を救う。決意とともに山に籠って修行に励む。一方、類い稀なる頭脳を持った空海は、高官への出世コースである大学で学問を修めたが、真理を求める心が満たされず、山林の修行者となって荒行を重ねる。二人とも安泰な将来を自ら捨て、地を這う苦しみを味わう。後に信仰の対象として崇拜される彼らも、迷い悩む人間であったという事実を、改めて認識させられる。

さて本作の特徴であるが、まず何よりも絵の美しさに圧倒され、画力とデザイン性の高さに目を見張らされる。作者、おかざき真里氏は広告代理店でデザイナーやC

Mプランナーを務めた経験を持ち、現在はイラストレーターとしても活躍している。その画力・デザイン力は本作でも遺憾なく発揮されており、唯一無二の魅力に溢れている。崇高な精神世界の描写は佛画を彷彿とさせ、怨霊や疫病の描写の怖ろしさは地獄絵図を思わせる。また、氏の表現力の一例として、私が紹介したのは「魚」である。氏は他の作品でも、無意識や精神世界の比喩に魚をよく描いている。本作第三巻では、特に過酷な荒行を成し遂げた空海の意識下を、巨大な異形の魚が泳ぐ。その迫力には息をのむばかりだ。

ここまで画ばかり述べてきたが、本作は教理や学問的なレベルも高い。第四巻では、最澄が旧勢力の面々を前に「天台法華講話」を行ない、論争を繰り広げる。その場面は、最澄自身が著した原文に極めて近い読み下し文が台詞の大部分を占め、頻出する専門用語に注釈は全く付かないにも拘わらず、



激論ぶりが読み手に熱く伝わってくる。これは作者が教理面を「阿吽社」の監修に任せ、安心して画に全力を傾注できたからだろう。《三車火宅》《一切衆生悉有佛性》といった言葉を、登場人物が互いにつけ合う本作が、成人向け漫画雑誌『月刊スピリッツ』に連載されている事実には、私は一僧侶として痛快この上ない。

第五巻で、最澄と空海の一行は唐(中国)の都・長安に到達した。今後の展開や登場人物の運命は、実は少し調べれば史実に明らかである。しかしそれでも尚、この物語は極めてスリリングであり、私は次巻の発売が待ち遠しい。連載が完結することを、作者と出版社に切に願うばかりである。

(佐々木耕志)

曹青秋田/第82号

発行/秋田県曹洞宗青年会

事務局/秋田市寺内神屋敷11-6 西来院内

発行責任者/中村卓道

編集責任者/菊地大樹

秋曹青ホームページ

http://www.sousei-akita.net/